

川内原子力2号機運開

(89万kW)



九州電力株式会社川内原子力発電所（鹿児島県川内市久見崎町）では、1号機（89万kW）に隣接して2号機（89万kW）を建設中であったが、去る11月28日に通商産業省の最終使用前検査を終え営業運転にはいった。

この2号機の運開で同社の原子力発電は玄海2基、川内2基の4基体制となり、総発電設備容量に占める割合が21%（289万8千kW）となった。

また、川内川対岸の同社川内発電所1・2号機（火力、各出力50万kW）も含めると川内地帯で総発電設備容量が389万8千kWとなり一大電源地点となった。

今回運開した川内原子力2号機は昭和56年5月に原子炉の基礎掘削工事を開始し順調な工事の進捗で本年3月初臨界に達し、以後、試運転が順調に進められ、計画より約2ヵ月早い11月28日に営業運転が開始された。

同2号機は全国で32基目（PWRとしては15基目）の商業用原子炉で、1号機と同様に、玄海1号

機（50年10月運開、出力55万9千kW）2号機（56年3月運開、出力55万9千kW）や先行炉の建設及び運転経験を十分に活用すると共に80万kW級PWR改良標準モデルプラントとして、最新の設計がされている。

九州電力株式会社においては、この2号機の運開で原子力発電の設備容量比はこれまでの15%（200

万8千kW）から21%（289万8千kW）となり、関西電力（26%）、東京電力（22%）に次ぐ容量比となった。また、発電コストの低い原子力発電が極めて好調に高稼働しているため発電電力量に占める原子力発電の比率は本年度予想で38%となる見込みで、ガス火力26%、石油火力13%を大きく上回っており、原子力発電主力時代を迎

えたと言える。

この2号機の建設工事は1号機建設工事に約2年遅れて着工され、両機建設が輻湊した時期には最大1100名余りの当社要員が従事しており、大規模で長期にわたったため、従事した方がたの苦労は大変なものであった。しかし、無災害

で工事を終えたのは、立派な原子力発電所をつくるという共通の目標を持って、工事施工面は言うまでもなく日常の労務管理面にも気を配り地域の人々との交流を深め一大電源地点にふさわしい基盤を全員でつくっていったことによるものであろう。